

「アメリカ帝国」の特質と帝国化の契機

比較帝国史研究会（09年11月22日）

菅 英輝（西南女学院大学）

1. 「アメリカ帝国」の特質をめぐる議論

（1）「慈悲深い帝国」論—アメリカ帝国肯定論

①ネオ・コンの帝国論（R. ケーガン—安全の提供者、M. ブート—「自由の帝国」、W. クリステル—「新アメリカの世紀」論）

②リベラル・リアリスト—アメリカ帝国主義批判

J. アイケンベリーの「民主主義的—資本主義的帝国」論（自由主義的多国間主義+勢力均衡論的リアリズム）の観点からのブッシュ政権の「新帝国主義」批判

（2）「門戸開放」帝国論

W. A. ウィリアムズの「アメリカ帝国」論

①アメリカ人の世界観—アメリカの自由と繁栄を維持するための「帝国」

②アメリカ例外主義の観念—外部世界を評価する基準としてのアメリカ的価値観の優位性への信念

③内と外の区別、内部世界=アメリカ的生活様式にとっての安全→外部世界=異質な世界の排除や改革の必要

④アメリカの「悲劇」—「アメリカ帝国」（自由と民主主義）の拡大が内外の自由を抑圧するというディレンマ(連邦政府への権力の集中 vs 自由の制約、エリート主導の対外政策)

⑤アメリカの「悲劇」から脱却するためには、“Empire as a Way of Life”を改める必要

（3）ステファンソンの「細胞自己増殖による帝国」論

①原型：ジェファソンの「自由の帝国」論—自決の原則にもとづく帝国的膨張

本来的に自由の領域の拡大であり、帝国と自治は矛盾しない。自由で自己決定力を有する人たちの膨張。「自由の帝国」+「自由のための帝国」

②「自由の帝国」を内部から腐敗させる「しみ」（異質なもの、アメリカ先住民、奴隷制度）の排除

③南北戦争を境に「自由の帝国」は変質

北部は南部に自由の観念を押し付けた。

④米西戦争以降のアメリカ—政体の一部ではないと同時にその一部でもある「帝国的付属物」を保有する政体。「文明の帝国」に近い。

⑤普遍的な諸原則にもとづき「世界を改造したり救済したりする権利と義務を有するという考え」

⑥「世界で対等な国家の存在を許容できない」という帝国意識

2. グローバリゼーションと「アメリカ帝国」論—ウッ드의「資本の帝国」論とアメリカ

①経済的権力（資本）と政治的権力の分離による「資本の帝国」のグローバルな規模での拡大。「資本主義には経済的な力と経済外的な力を分離する能力がある」「この二つを分離することで、資本の経済的な力は、既存の政治的な力や軍事的な力の及ばないところまで手を伸ばすことができた」

②グローバルな資本主義の源泉は資本主義である。「新しい帝国主義は、資本主義から生まれた帝国主義である」

③経済的権力（資本主義）は領域的政治権力（国民国家）に依拠している。

「同時に資本のこの経済的な力は経済外的な力の支えなしには存続できない。かつていまでも、経済外的な力を提供する国家なしには、資本主義は存続できない」

「グローバルな資本主義には、システムの内部に国民国家が存在していることが必要」「こうした国家はグローバル資本主義の命令にしたがって行動している」

国家の役割—「資本蓄積の条件の創出と維持（ネグリ=ハートの<帝国>批判）

c f. R・コックス「国家の国際化」、R・フォーク「国家の道具化」

④「資本の帝国」は「複数の国家で構築されたシステムに依存している」

「グローバリゼーションの政治的な形式は、グローバルな国家でも、グローバルな主権でもない」グローバリゼーションとは、「複数の国民国家が国内で主権を掌握しながら、支配と従属の複雑な構造のうちでグローバルな経済を統治すること」「新しい帝国主義を統治し、実行している」のは、「複数の国民国家のシステムである」（ネグリ=ハートの<帝国>との類似性）

⑤「最終的には、こうしたシステムを管理するために、すべての諸国を従わせることのできる唯一の圧倒的な軍事力をもつ帝国の権力が求められるようになるのは、避けがたい」

⑤アメリカの軍事的な覇権の重要性の高まり（「過剰な帝国主義」）

「軍事力という経済外的な権力が帝国主義に必須のものとなっている」

3. 「アメリカ帝国」形成史の時期区分—連続性と非連続性

(1) 「陸の帝国」—「アメリカ帝国」の基盤が確立された時期

ジェファースンの「自由の帝国」論

①「帝国と自治」、自決と自治の論理（帝國的膨張は自決の名においてなされ

る)、1787年 北西部領地条例

②「異質なるもの」の排除—アメリカ先住民に対する「殲滅戦争」による「国内植民地」の拡大。

- ・「アメリカ帝国」の原型としてのフレンチ・インディアン戦争、「殺戮の帝国」の拡大という側面（1754年、古矢）。
- ・正当化の論理—「明白な運命」論、西欧文明の優位性、アングロ=サクソン民族の優越性、ロックの所有権の理論

③南北戦争—自由で自己決定力を持つ人間の膨張と奴隷制度拡大との矛盾に決着をつける市民戦争。

- ・北部が南部に押し付けた「自由」—ジェファースン流の帝国拡大の流儀とは異なる。
- ・武力で問題を解決するというやり方は、ジェファースンの「自由の帝国」の変質を意味する。

(2)「海洋帝国」と米西戦争後の海外植民地の獲得

- ・ステファンソン—「帝國的付属物」を保有する政体。「文明の帝国」に近い。
- ・「アメリカ帝国」の「ヨーロッパ化」、だがアメリカ型「海洋帝国」（帝国主義論争の帰結）（古矢）
- ・「植民地主義膨張論者」（マハン、TR、アダムズ）

正当化の論理—自己管理能力を喪失した国に対する文明国の義務、治安維持/秩序維持

- ・「門戸開放帝国」論者—「非公式の帝国」、「植民地なき帝国」（マグドフ）、「新しい帝国」（ラフィーバー）、「自信に満ちた工業大国の政策」（ガードナー）、帝国主義=植民地主義（反帝国主義者）、「自由貿易帝国主義」、「安上がりの帝国主義」、「できるだけ非公式に、やむを得ない場合には公式に支配する」帝国。
- ・「非公式の帝国」「門戸開放型帝国」が主流になっていくにつれて、より普遍主義的な理念と論理で「アメリカ帝国」の空間的拡大を正当化するようになり、半面、人種主義的要素、「明白な運命」論などは公的レトリックとしては後景に退く。

ジョン・ヘイの門戸開放通牒：中国における通商の機会均等（自由貿易論）、中国の領土的・行政的保全（主権の尊重）

- ・ウィルソンの「自由主義的国際主義」（1918年の14カ条演説）

① 自由民主主義論（アメリカ型民主主義）

② 自由貿易論

③ 自決権の尊重

④ 集団的安全保障と国際連盟

- ⑤ 国内体制と国際秩序は不可分という考え
 - ・ FDR—ウィルソン主義の継承と制度化
- ① ウィルソンの国際主義＋地政学的・権力政治的発想
- ② 大同盟（自由主義的秩序＋社会主義的秩序＋帝国主義的秩序の並存）
 - (3) 冷戦期の「アメリカ帝国」
 - ・ 冷戦一二つの「普遍主義国家」、「使命感国家」の闘争
 - トルーマン・ドクトリン（1947年）—「自由主義」対「全体主義」
 - ・ 「帝国」「帝国主義」は「ソヴィエト帝国」を非難する用語となる
 - ・ アメリカの帝国支配の制約
 - ① 冷戦統合＝反ソ・反共による統合
 - ② 第三世界のナショナリズム、脱植民地化運動—アメリカの第三世界政策は、自決権の尊重か支配かで揺れる（自治能力への疑念、人種的偏見、戦略的要請、反植民地主義の伝統、市場・資本の論理）
 - ③ 西側陣営対東側陣営—地理的限界
 - ④ 核兵器の存在
 - ・ 帝国支配の技術—軍事力、非民主的手段の多用（「アメリカの理念」の逆説、古矢）
 - (4) 冷戦終結後の「アメリカ帝国」—ウッズの「資本の帝国」論の有用性？
 - ・ 「ネオ・リベラル国際主義」（市場原理主義）の影響力の拡大と「民主主義の赤字」
 - ・ グローバリゼーションの国民国家への影響
 - 国家の「道具主義」化（R. フォーク）、国家の「国際化」（R. コックス）
 - ・ 世界秩序＝国内秩序（民主化、人権）＋国際秩序（民族自決権、主権）→国内秩序と国際秩序の境界の希薄化 i.e. 民主化、人権が世界秩序形成において占める重要性の増大
 - ・ 内政不干渉原則や主権概念の見直し論議
 - 人道介入論、制限主権論
 - ・ ブッシュ・ジュニア政権の帝国意識と帝国政策
 - ① ネオコンの「アメリカ超大国」論、「単極のとき」（クラウタマー）
 - ① ダブル・スタンダード、単独主義、国連軽視（法、規範、ルール創造、変更、無視の傾向）
 - ② 軍事力偏重—グローバル化の矛盾、紛争、秩序の破壊への対処
 - ③ 対テロ戦争と法外の領域の拡大と再生産、人権侵害
 - ④ 「レジーム・チェンジ」による自由と民主主義の拡大—民主主義推進は「アメリカ帝国」の政策の用具と化している
 - ⑤ グローバル化の推進—脱中心的な金融・情報の自由化

4. アメリカ国家の帝国化の契機

(1) すべての国家は膨張主義的性向を持つ

国民帝国論 (山室信一)

(2) 「軍事帝国」論

「軍事力の国際的分布から帝国を捉え、特定の政府に軍事力が集中した状況を『帝国秩序』として考えている」(藤原帰一)。「門戸開放帝国主義」論を批判し自由貿易論は領土支配と結びつかないというのがその理由。

反論:「帝国主義との関係は、国家論を経由して初めて理解できる」(パニッチ/ギンディ) 国家の役割の「帝国主義的側面」を説明する必要

・統治手段の一つ

(3) 理念、普遍主義的な価値観

・ステファンソン「きわめて興味深い帝国」—①「その普遍的な妥当性と時代を超えた意義を有する諸原則に従って、世界を改造したり救済したりする権利と義務を有するという考え」、②「アメリカは世界で対等な国の存在を許容できない」という帝国意識

・統治原理としての重要性

(4) 経済的動因—資本の論理

・ウィリアムズらウィスコンシン学派、マンスリー・レビュー誌系

・格差原理としても作用

(5) 帝国と秩序維持

・国際的契機—グローバル化による秩序の動揺、地域的混乱への対処。

冷戦後のアメリカにとって、「ならず者国家」、「テロ国家」、「反米国家」、テロリストのネットワーク、「崩壊国家」は、グローバル資本主義の利益の促進にとって深刻な障害になっているとの観点から、これらの国家の改造が益々緊急の課題となっているとの認識。

・グローバル化時代のアメリカ国家の役割

「国際的な資本主義秩序の管理運営に貢献するような形で、国内的な資本主義秩序の管理運営責任を引き受けること」(R. コックス)

・アメリカの戦争—「非公式帝国」の構造を維持するための戦争

おわりに

(1) どのような国内外の条件が整ったときに帝国主義の政策となるのか

(2) 誰の利益になり、誰の損となり、誰がどのような形で利益を拡大しているのか (初瀬龍平)。

(3) 国家意思はどのように形成されるのか。国家意思＝政策決定者の意思、多様な資本家の意思、独占資本化の意思、軍産複合体、世論の動向。

政府の運転席に座っていたのは、クリントン政権下では、財務省、ブッシュ・ジュニア政権下では、ペンタゴン、ネオコン、軍産複合体の代弁者？

参考文献

1. 拙稿「領土拡張の動き」吉見俊哉その他編集『現代のアメリカ』大修館書店、2004年、35-46頁。
2. 拙稿「解説『アメリカ帝国とは何か』」ロイド・ガードナー/マリリン・ヤング『アメリカ帝国とは何か』ミネルヴァ書房、2008年、331-353頁。
3. 拙稿「アメリカ『帝国』の形成と脱植民地化過程への対応」北川勝彦編著『脱植民地化とイギリス帝国』（イギリス帝国と20世紀第4巻）ミネルヴァ書房、2009年、111-152頁。
4. 拙稿「米国のヘゲモニーの現状と『アメリカの世紀』論」『アメリカ研究』第33号（1999年3月）、1-18頁。
5. 「アメリカ帝国論の現状と世界秩序の行方」日本平和学会編『世界政府の展望』早稲田大学出版部、2003年、45-62頁。
6. 拙著『アメリカの世界戦略』中公新書、2008年。
7. A. ステファンソン「きわめて興味深い帝国」同上、301-329頁。
8. 初瀬龍平「アメリカ帝国主義論の新展開」菅英輝編著『アメリカの戦争と世界秩序』、31-61頁。
9. 古矢旬『アメリカ 過去と現在の間』岩波新書、2004年。
10. エレン・メイクシンズ・ウッド『資本の帝国』紀伊国屋書店、2004。
11. 小野沢透「現代アメリカと『帝国』論」『史林』第88巻1号（2005年1月）、90-125頁。
12. レオ・パニッチ/サム・ギンディン『アメリカ帝国主義とはなにか』こぶし書房、2004年。
13. 同上『アメリカ帝国主義と金融』こぶし書房、2005年。
14. Falk, Richard, *Predatory Globalization: A Critique*, Polity Press, 1999.
15. W. A. Williams, *Empire as a Way of Life*, Oxford UP, 1980.
16. Do, *The Tragedy of American Diplomacy*, Delta Book, 1962.
17. Kolko, Joyce and Gabriel, *The Limits of Power*, Harper & Row, 1972.
18. Bacevich, Andrew J., *American Empire*, Harvard UP, 2002.
19. Maier, Charles S., *Among Empires*, Harvard UP, 2006.
20. Hobsbawm, Eric, *On Empire: America, War and Global Supremacy*, The New Press, 2008.